マルクスの歴史発展段階論（階級闘争史観）と唯物史観

１.『共産党宣言』(1848)

「今日までのあらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である」(『共産党宣言』岩波文庫版、33 頁)。

「自由民と奴隷、都市貴族と平民、領主と農奴、ギルドの親方と職人、要するに圧制者と被圧制者はつねにたがいに対立して、ときには暗々のうちに、ときには公然と、不断の闘争をおこなってきた。この闘争はいつも、全社会の革命的改造をもって終わるか、そうでないときは相闘う階級の共倒れをもって終わった」(同 34 頁)。

「全社会は、敵対する二大陣営、たがいに直接に対立する二大階級－ブルジョア階級とプロレタリア階級に、だんだんとわかれていく」(同 40 頁)。

「ブルジョア階級は、封建君主の支配下にあっては圧迫された身分であり、自由都市にあっては武装し、自治をもった組合をなした。･･･そしてついには、大工業と世界市場とが建設されて以来、ブルジョア階級は近代代議制国家において、独り占めの政治支配を闘いとった。近代国家権力は、単に、全ブルジョア階級の共通の事務をつかさどる委員会にすぎない」(同 41 頁)。

「ブルジョア階級は、歴史において、きわめて革命的な役割を演じた。ブルジョア階級は、支配権をにぎるにいたったところでは、封建的な、家父長的な、牧歌的ないっさいの関係を破壊した」(同 42 頁)。

「ブルジョア階級は、生産用具を、したがって生産関係を、したがって全社会関係を、絶えず革命していなくては生存しえない」(同 42 頁)。

「ブルジョアジ階級は、世界市場の搾取を通して、あらゆる国々の生産と消費とを世界主義的なものに作り上げた」(同 44 頁)。

「だが、われわれが知ったことは、ブルジョア階級の成長の土台をなす生産手段や交通手段は、封建社会のなかで作られたということである。この生産手段と交通手段の発展がある段階に達すると、封建社会の生産や交換がおこなわれていた諸関係、農業と工場手工業の封建的体制、一言でいえば封建的所有関係は、そのときまでに発展した生産諸力にもはや適合しなくなった。それは生産を促進しないで、阻害するようになった。それはいずれもみな変じて足かせとなった。それは粉砕されねばならなかった。そして粉砕された」(同 46 頁)。

「ブルジョア階級が封建制を打ち倒すのに用いた武器は、いまやブルジョア階級自身に向けられている。しかしブルジョア階級は、みずからに死をもたらす武器をきたえたばかりではない。かれらは、この武器を使う人々をも作り出した－近代労働者、プロレタリアを」(同 48 頁)。

「現在ブルジョア階級に対立しているすべての階級のうちで、プロレタリア階級のみがほんとうに革命的な階級である」(同 52 頁)。

２.『経済学批判・序言』(1859) における公式

「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係に含まれている。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律的および政治的上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでの内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはそれの法律的表現に過ぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎

の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激に覆る」（『経済学批判』大月版全集第13巻、6-7頁）。

３．『資本論』（1867-94）第1巻「労働過程」における指摘

「労働は、まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するのである。人間は、自然素材に対して彼自身一つの自然力として相対する。・・・・・・人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然［天性］を変化させる。彼は、彼自身のうちに眠っている潜在的能力を発現させ、その諸力の営みを彼自身の統御に従わせる」（大月書店普及版第一分冊、1968年、234頁）。

↓

マルクスによれば、「自然素材」にかかわっていく人間もまた「一つの自然力」にほかならず、それゆえ歴史は人間による自然への「働きかけ」の所産であり、人間自身の自然を変化させてきた過程である。

↓

マルクスにおいては、歴史の過程は、物質的なものや諸制度といった人間の外部世界における変化としてのみ意味があるのではなく、むしろ人間自身の内的自然の変化ないしは内面的変化として根源的に意味づけられている。「労働過程」が本質的に目的意識的な精神的活動の過程であるということこそが、人間を他のいっさいの動物から根本的に区別する「類的本質」と考えられているのである。

「労働過程の終わりには、その始めにすでに労働者の心象のなかに存在していた、つまり観念的にはすでに存在していた結果が出てくるのである。労働者は、自然的なものの形態変化を引き起こすだけではない。彼は、自然的なもののうちに、同時に彼の目的を実現するのである」（同上）。

↓

「労働過程」、つまり「自然との物質代謝」の過程は、あらかじめ意識のうちに「観念的」に構成された一定の「心象」を自然の形態変化をとおして実現していく活動である。人間の本質は、労働における目的意識性の追求であり、外部世界のなかに個性的な成果を実現していこうとすることである。

↓

マルクスにおいては人間の経済活動がすでにそのうちに目的意識的な精神作用を含むものであることが示されている。

４．『ヘーゲル法哲学批判』（1843）における市民社会の規定とその後の理論的発展

「ヘーゲルは二つの固定した対立物、二つの現実的に別々の領域としての『市民社会』と『政治的国家』の分離から出発する。この分離は確かに現実的に現代国家のうちに存在する」（『ヘーゲル法哲学批判序説』国民文庫、1970年、129頁）。

「完成された政治的国家はその本質から言って、人間の類的生活であり、人間の物質的生活に対立している。この物資的生活という利己的な生活のあらゆる前提は、国家の領域の外部に、市民社会の中に、しかも市民社会の特性として存続している。政治的国家が真に成熟を遂げたところでは、人間は、ただたんに思想や意識ばかりでなく、現実において、生活において、天上と地上との二重の生活を営む。天上の生活とは、政治的共同体における生活であって、その中で人間は自分を共同体的存在と考えている。地上の生活とは市民社会における生活であ

って、その中で人間は私人として活動し、他の人間を手段と見なし、自分自身をも手段にまでおとしめ、疎遠な諸力の遊び道具となっている。政治的国家は市民社会に対して、ちょうど天上界が地上界に対するのと同様に、精神主義的に振る舞う。政治的国家は、市民社会に対して、宗教が世俗的世界の偏狭さに対立しそれを克服するのと同じように対立し、同じ仕方でそれを克服する」（「ユダヤ人問題によせて」『ユダヤ人問題によせて　ヘーゲル法哲学批判序説』岩波文庫、1974 **年、**24-5 **頁）。**

↓

①政治と経済、精神と物質の関係をトータルな全体的関連性の中で捉えている。
②近代社会における政治意識の批判を宗教批判と方法的には同一の意味を持つと見なしている。すなわち、近代社会における政治イデオロギーがその合理主義的外観にもかかわらず宗教としての機能を果たしていると見ている。
③市民社会がまさに物質主義・利己主義の世界として安易に一面化されて描かれている。

↓

マルクスは、西欧における近代市民社会ないしは近代資本主義社会の成立が、歴史的に先行した宗教改革運動の中で遂行された、日常生活の精神的再編成によって歴史的に媒介された事実（ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』によって指摘された）を見逃す。

↓

そのような欠点はあるが、近代人の市民と公民への二重人格的分裂を鋭く透視し、未来社会における人間的自然の回復を展望し得たところにマルクスの独創性があった

↓

『経済学・哲学草稿』（1844）、『ミル評注』（1844）、『聖家族』（1845）を経て、マルクスは、「私有財産の主体的本質は、対自的に存在する活動としての私有財産、主体としての、人格としての私有財産は、労働である」（『経済学・哲学草稿』岩波文庫、119 頁）というテーゼに達し、「ヘーゲル法哲学批判」における一面的な市民社会認識、すなわち市民社会をたんに物質主義・利己主義の世界と見る従来の視点を克服した。あらたに『聖家族』（1845）において展開された市民社会論は、市民社会をもはや一面的なものとしてではなく、それ自身、否定的側面と肯定的側面とをともにはらんだものとして描かれている。**「市民社会の成因はけっして原子ではない」（「聖家族」新潮社版『マルクス・エンゲルス選集』第** 1 **巻、**128 **頁）。「だから自然必然性や、どれほど疎遠に見えようとも人間の本質的な特性や利害が市民社会の成員を結びつける」（同上、**129 **頁）。**

５．結論

『経済学批判・序言』において「経済的土台」とされた市民社会は、たんなる物質的なものとして捉えられているのではなく、それ自体の中に目的意識性と独立した人格を持つ主体としての人間が含まれているものとして想定されている。マルクスが、「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する」と言ったとき、その「人間の社会的存在」とは、何か物質的な、あるいはたんに経済的なものを意味するのではない。なぜなら、「意識とは、意識された存在以外のものではけっしてあり得ない」し、「人間の存在とは、彼らの現実的生活諸過程のことを意味する」からである。そして、この「現実的な生活過程」とは、もちろんたんに物質的なものではなくて、主体的人間の「現実的活動」であり、いわば人間の生き方そのものなのである。